ぜにそせ。　―　全世界二次元化阻止戦争　―

キラワケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぜにそせ。　―　全世界二次元化阻止戦争　―

【Ｎコード】
Ｎ６８６９Ｎ

【作者名】
キラワケ

【あらすじ】
―全世界二次元化計画―
一部はそんな風に言い表す、最近の出来事だ。世の中のデジタル化は目まぐるしい。時は２０２７年、世界は完全なるデジタル化社会。ショッピング、トーク、ゲームなどの娯楽全般は勿論、学校や仕事までもが情報通信技術を駆使して完全デジタル化され、ものの見事に外出する必要が無くなった。つまりはインターネット無くしては生活不可能までに日常に溶け込み始める。娯楽、職、教育と揃いも揃い、そして驚くべき……そして全ての元凶である技術が完成した

――

そんな世界の波に逆行し抗う人達の物語。

１－０　人類の現実逃避と、ある二人のこと。

「お前のことが好きなんだぁぁぁぁ」
「ご、ごめんなさいっ！」

―ＢＡＤ　ＥＮＤ―

ちっ、また攻略失敗か。
フラグを立てず特攻したのが敗因ってトコだな。

「あー、ヒロイン落とすの面倒くせぇ。　だからギャルゲーは嫌いなんだよ」

まぁ、俺そのものが異性と付き合うことを志望してないしな。
……夢も希望もなくてつまらない？　けっ、ほっとけ。　それもこれも――

「それでいてなんでギャルゲーなんて買ってるの？」

こいつのおかげだ。
というかギャルゲーなんてギャル目当てで買っている訳じゃない。

「シナリオとＣＧに興味があるからな」

ギャルゲーなるものはかなり安直な展開シナリオが多い。
シナリオの出来が悪くなるのと比例するようにＣＧの完成度は高かったりする。　もちろん、全ての作品に言えることではないが。

シナリオとCGの完成度共々良いものもあれば、シナリオ破綻にCG崩壊という残念極まりない作品もある。

ギャルゲーという一ジャンルの中で良作を探し出す――というのが今の俺の楽しみであり、趣味だ。

ラノベといっても、中にはラノベという括りを超えた素晴らしい作品も存在する。

一般小説も探せば探すほどに良作に巡り合える。

しかし、俺はあえてギャルゲーという縛りの中で良作を探すのだ。

かといえば、駄作だからといってそれを忘却の彼方へと葬りさる訳ではない。

駄作だとしても、少なからずは誇れる点があるものだ。　それを探すのも面白い。

救いようのないカス作品も観方を色々変えて、違う楽しみ方をするというのも面白い。

ということで、一応俺はギャルゲーマニアだ。

「金の無駄遣いだと思う……」

「ふん、俺的には有意義な使い方が出来ていると自負している」

楽しみ方は個々で見つけだすものだ。自分の金で何を買って、どう楽しむかなんて自由だろう？　抑制など受ける理由は無い。

「というか……女の子が遊びにきているそんな時までギャルゲーというのはどうなんだろな？」

女の子……はてさて？

「……誰だそれは？」

うしろで何かが切れる音がした。　しかし気にしてしまうのは果てしなく時間の無駄だと俺は考え、思考中止。

「……喧嘩を売ってるのが分からないのか？」
「いや、だって女の子なんて生涯一回も連れ込んだ事ないぞ？」
「いやいや！　なんで純粋に疑問に思ってんだよ！」
「……今、この部屋にいるのは俺とお前だけだからなぁ」
「あんたの中でアタシはどういう扱いになってんだよ！」

……？

「そりゃ、退屈しない話相手および小学校時代からの友人と言っぐはっ――」

横から来る肘が俺の顔を捉え、見事にスッ飛んだ。

「……なにすんだよ」
「お前は本当にデリカシーの欠片もねぇな！　アタシは立派な女子だバカっ！」

らしい。　まぁ、名義上は女子だけどな。　……不確かのには理由があって――

「……その体で女と言い張るには、乏しい胸だな」

「っ！　仕方ねぇだろ！　ここだけは成長が遅いんだよ！」

「……」
「どうした？　アタシの体をまじまじと見て」
「いや……ブラジャーという拘束具は拘束するものがないから不要だなぁ、と考えてた。　というか付けてんのか？」
「っっ！　完全なセクハラだぞお前！　失礼飛び越えて変態だ！　というか付け取るわっ！」
「……絆創膏で十分だろ」
「それこそ変態だ！？」
「うるさい、その胸とは言い難いまな板の上でキャベツでも千切りにしてろ」
「！？　流石にアタシも怒るぞ！」
「どーぞどーぞ」
「！　……失せたわ。　というかなんでこんな性悪で最悪な奴に家に遊びに来てんだろうな」
「まぁ、それは伝統みたいなもんだろ」

ということで彼女（文面では一応彼女と呼んでおこう）とは長い付き合いだ。
俺だけがこんなにボロクソに言い捨ててると言えばそうでもない。
彼女は彼女で――
「胸の事をこんな平凡を具現化したようなお前に言われたくないわ！」

そんなことを言ってくる、まぁそれに関しては俺も重々承知してるが。

「まぁ、平たい同士気長にやろうじゃねぇか」
「……性格容姿が平凡な男と胸がす、少ないアタシじゃどっちがいいと思う？」

「体を洗うのが楽でいいだろ？」
「●ね！　いい加減に●ねっ！」

と言う訳で、彼女を一女性として観た事は一度もない。
胸が存在しているというのも憚れるほどに無く、とにかく色気がない。
女子高生で、この胸は正直今後に期待出来ない。

友人として過ごしてるだけで、異性と捉えたことはない。
というか、彼女が一応異性であるせいか異性に興味を失くしたのも事実。

ギャルゲをやっても「かわええ～」とか「萌え～」とかは感じない。「綺麗」と感じることはある。

何度も言うが彼女は友人だ。
話していて退屈しない友人。
今日の俺の冗談と本音が混じった事も仲が良く、ジョークが通じるから口にする。

あんな反応をすれど、分かっていると思う。

「●ねはしないな、ミサキと話すことはいくらでもあるからな」
「……へ、へぇ？　話すって、どんな？」
「貧乳と巨乳、果たしてどちらの需要が高いのか」
「当てつけか！」

異性として見ずに、ミサキと見れば良い友人だ。
異性としてはみていないが、大切な友人ではある。　勘違いはしないでほしい。

「まぁ、そんなお前好きだけどな」
「え？」
もちろん、友人としての――
「ライクとしてな」
「期待持たせんな！」
……鈍感でなく鋭敏な俺は、どうやらこいつに好意を抱かれているようだ。
しかし異性への興味などない、クルものが無いのだ。
「ふん、なら俺をトキメかせて見ればいい」
ないだろうけどな。
「……トキメかしたら、アタシを女だと認めるのか？」
「さぁな」
無理だろ。　ギャルゲで、何の反応もしない俺が。
「……わかったよ」
何が分かったのだろう？
――ちなみに俺が今までどんな事を言っていたのか、書き出して分かったことがある。
酷い。

今日は特に酷い。
なんだろうね、俺の趣味が否定されたからか？
もう、これは嫌われてもしょうがない。
自分が愚かすぎて言葉も出ない。

もしかしたら、彼女が友人でなく異性になるのが怖かったからなのかもしれない。
関係が変わってしまうのが嫌だったからとか？
気軽に話せる相手を失いたくなかったから？
これで、関係が終わるのなら……仕方ないのかもな。
今の俺には後悔するしかなさそうだ。

そして案の定、俺と彼女の関係は終わった。
しかし、それは異性として意識しなくて済む友人の関係のことで――

「……ど、どう？」

画面に映る、確かに彼女な彼女は――見違えていた。

「……困るな」

ときめいた。　初めて胸が熱くなった。
というか一瞬で惚れた。

……と、彼女への緻密な感想を述べる前にあらかたの日常をお話したい。
今日のように罵詈雑言を連ねている日は少ない訳で、俺を誤解しないでほしい。
まぁ、弁解の意を籠めて、話していこう――

１－１　人類の現実逃避と、ある二人のこと。

なんでもかんでも二次元化！
立体から平面へ。現実から仮想へ。
辛い日常を逃げ出した先は、夢と希望の二次元世界！

あんな娘やあんな人とお近づきになっちゃったり。
地道にサラリーマンやってたけど、今は勇者で敵を倒してガッポリだったり。
妻にそっぽを向かれて険悪すぎる家庭から逃避して、二次元世界で家庭築いちゃったり。

良い事ずくめの二次元世界！
もう三次元は古臭い、これからは画面の中で全て完結するんです！

さぁ、あなたも二次元の世界へ向かいましょう！
きっと新しい自分と新しい世界が手に入りますよ？

……は？

よくもそんな中学生の妄想みたいなことを垂れ流し出来たもんだな。
それにホイホイ付いて行くあんたらもどうよ？

ああ、くだらない。
ほんと、ばからしい。

１―２　人類の現実逃避と、ある二人のこと。

―全世界二次元化計画―

一部はそんな風に言い表す、最近の出来事だ。
世の中のデジタル化は目まぐるしい。

時は２０２１年、世界は完全なるデジタル化社会。

ショッピング、トーク、ゲームなどの娯楽全般は勿論、学校や仕事までもが情報通信技術を駆使して完全デジタル化され、ものの見事に外出する必要が無くなった。
つまりはインターネット無くしては生活不可能までになり、それはごく自然に日常へと溶け込み始める。
自宅警備員という皮肉交じりの職業も、本当に自宅中にカメラ回線を張りめぐらせて警備するそんな仕事も現実に現れたのだから失笑モノだ。
娯楽、職、教育と揃いも揃い、そして驚くべき……そして全ての元凶である技術が完成した。

その名も「セカンドデイズシステム」だ。

その技術とは人の意識記憶をデータに変換し、いずれかの情報端末に送り込むという画期的なものだった。
システム完成によって、それを交流の場としたり、ある者には働き場所、一部の現実で充実した生活を送れていない者は心の拠り所に。
あまりにもよく出来たシステムで、次第に人々へ浸透していく――

「よぉ」

「よっ！　ショウヤ！」

藍空高校。なんの変哲もない田舎町に存在する高校だ。
そんな特色のない町の学校に俺はちまちま通っている。

「……相田、来ねぇな」

「そうだねー……あいつも遂に、か？」

何の話をしているかというと、だ。

『よー！　翔也、岬』

教室に響く声。

「ああ……相田、遂にお前もか」

『いやいや、お前らが遅れてるだけだろー？　今時律儀に登校するなんてお前らぐらいだぜ？』

ちなみに相田は不登校な訳ではない……一応弁解はしておくとしよう。つまりはなんだ……そうだな、言うならば。

学校に自分の足で登校していないだけだ。

『おっはー、岬！　おお、相田クンもデータ通学ですな？』

今度は綾崎だ。クラスメイトの綾崎の声が近くから、ふいに聞こえてくる。

『おうよ！　やっと環境が整ってな！　いや徹夜しちまったよー』

そう、なんとも嬉しそうに答える相田。

「……どうも、俺には好きになれんな」

『んだよ翔也、連れないなー』

「なんというかな……」

「電子パネルと会話するのは違和感しか感じねぇよ」

電子パネルだ。

ノートぐらいの薄さに大きさ、面積めいっぱいに展開される画面のことだ……そろそろ話が見えないだろうからここでネタバラシを。

俺と友人の岬以外は電子パネルを介して学校に通学している。

自宅から学校の教室へのインターネット回線を介して自分のパソコンから学校の電子パネルに通信接続して彼らは通学している。

２０００年代初頭ならテレビ電話を連想して頂ければいい、そのテレビ電話を常時接続した状態がこの画面と考えれば良いと思う。

画面には見慣れた友人の顔が表示されていて、そして音声出力をして俺達と会話している。
傍目には俺が1人画面に話かけている光景なのだが、今の時代では基本当たり前で特に気にする必要はない。

人そのものが学校に来ずに自宅からインターネット回線を接続するだけで授業を受けることが出来るということだ。
正直俺は……気に食わないというか、あまりにも機械的で気に入らない。

『そうかー？　俺は家から出なくて済むからいいけど』

メリットはそんなところがある。　通学時間の短縮だ。　かつて存在した通信学習のリアルタイム版に見えなくない。
その他にも多々あるが、俺は推進派どころか反対派でさえあるのでこれ以上は言及しない。

ちなみに自宅だからといってもダラダラ授業は受けられないように、授業時間中は学校側からの監視が働いている。
油断しているといつの間にか単位を落としていたりするらしい。

俺はというとそういう自分の戒めとかの理由ではなく、学校に足を運ばないという事がとにかく気に入らないのだ。
なんでもかんでもデジタル化しているこの現状が気持ち悪い、吐き気がする。

少し想いを巡らせている内に、机上に置かれた電子パネルにクラスメイトらが自宅から接続し一応「登校」し終えていた。

キーンコーンカーンコーン……学校の始まりのチャイムが鳴り、

教室の戸を開いて担任がホームルームに現れる。
ちなみに校舎はガタが来始めているが、なんとか手動の戸が健在だ。
「出席を取る――ああ、相田もネット通学か。　これでお前らだけか、井口に椿原」
「はい」
「はいっ」
『今日からネット通学でーす』
「初めてのネット通学でウキウキしているのは分かるが、調子に乗るなよ」
『うーっす』
「にしてもその薄っぺらいモニタを通してデータ通学してるんだよな……どうにもアナログ人間な俺には解せないな」
「全面的に同意しておきます」と俺は全力で同意。
『ノリ悪いぞ、翔也ぁ！』
『いいじゃない！　授業は受けてるんだし！』
『……非効率だと思いますよ？』
「うっせーな」

「おいおい、お前ら静かにー　ってことで出席を取るぞ」

まぁ、まだ話切れていないが、一つ言わして貰うと。

……この、今の時代の流れは個人的に大嫌いだね。

ちなみに、こう語り続けている俺は「井口　翔也」そして俺ともう一人の登校者は「椿原　岬」

彼女との関係はと言えば、幼馴染なのだが――今はどうでもいい事だ。

１―３　人類の現実逃避と、ある二人のこと。

ガトンゴトン。

線路の継ぎ目を走り抜ける度に電車はそんな音を奏でる。
車内にはそんな音の他には床下から忙しなく稼働するモーターが生み出し続ける轟音が聞こえてきている。

ここはとある田舎町。家から学校までは電車四〇分徒歩一〇分。

朝の陽ざしが差しこむ車内はあまりにも閑散としていた。

２０１７年――、教学、職のデジタル化開始で、この列車から人が消えた。
道から、町から、学校から。
至るところから人が消えて行く。

この列車もかつては、都会から落とされた古い電車が奏でる轟音の中でもめげることなく学生同士や職場仲間の会話が有った。
座れないほどの混雑をみせた自宅の最寄りから学校のある町までの列車も、今では長椅子をベッドにして大いびきをかいて熟睡することも容易だ。

乗客は低下の一途を辿り、本数が減ったので乗り過ごすと大惨事で、こちとら困る。
代わりに８０年代までに衰退した貨物輸送が、通販利用などが格段に向上し物販需要が上がった事から復活。そして大増便。
普通の列車よりも貨物列車の方が多いんじゃないか、というまでにかつての立場は大逆転した。

というか普通の列車が風前の灯であったりする。
それもそのはずで、俺と一部の学生以外は老婆やら頑固に鉄道輸送に固執する爺さんや絶滅寸前のマニアぐらいだ。
まったく、この世の中は狂ってる。
本当に気に入らない世界になったもんだ。

俺の趣味は、前述したか分からないが「ギャルゲ」集めだ。
しかし、何度も言うがその”ギャル”目当てではないということをもう一度言っておこう。

大事な事だからな。

さて、そんなギャルゲの入手法はというと、だ。
通販もまだシステム開始前までは使っていたが……硬貨や紙幣の電子化が進み、電子マネーが市場を占め始めてからは――
銀行振り込み以外での現金支払いを拒絶するようにまでなった、もはや呆れを通り越して泣いた。

「ああ、そんなに電子化したいってか！」

００年代の株券の電子化やら携帯支払いシステムの完成から嫌な予感はしたんだよ……そうしたらこれだよ。

「銀行や、一部の商店でしか機能しない金ってなんなんだよ……」

ふざけてんのか、ああ？

あの天下の日本銀行も日本銀行券こと紙幣の印刷を止めちまったしさ、本当この時代の流れには付いてけねぇわ。

……入手法の話に戻って、だ。

とある闇ゲーム店で、最新ギャルゲをＤＶＤにインストールして貰っていたりする……少々割高だが、致し方ない。

後は、ＤＬ販売完全移行前の作品群だろう。　駅前の中古ショップにはかなりお世話になっているものだ。

実際昔の作品こそ良く出来ていたりする……そりゃちょっとキャラデザは古臭かったりするけども。

ダ・●ーポなるものは、当時非難の声が上がったそうだが、俺は結構好みだぞ？

それで今日は、学校帰りに中古ショップに訪れた。

「しょうやぁー　はやくいこーぜー」

「あ、あと１０分……」

決して睡眠時間を伸ばそうとしている訳ではないぞ？

俺はギャルゲ漁りをしているだけだ！　補足でエロゲもたまにやる！

「お？」

これは……ふーむ、絵は綺麗だな。

「ＲｕｒｉｉｒｏＤａ――」

「翔也っ！　電車行っちまうぞ！」

「うおお！　そりゃやべえ！」

先程手に取ったゲームを名残惜しいが元の位置に戻して店を出る。

……明日、金持ってきて買うかな。　ううむ、絵とシナリオの出来不出来が気になるぜ……

「走るぞっ！」

「おおうっ」

シャッター街を駆け抜けて、本数の少ない列車で俺らは家へと向かう。

１－４　人類の現実逃避と、ある二人のこと。

この世は見事なデジタル社会。
それに全力で遅れを取っているのが我が家とも言える。

ここらでも未だに照合式でない玄関を持つのはこの家ぐらいで、典型的な鍵式。
かつては不用心だったそうだが、今ではこんな古い設備を専門にする泥棒なんぞ残って居なく、逆に安全な程だ。
時代の流れ以前に、時代が９０年代後期で止まっているかのようにも見える。

テレビこそ薄型液晶……と言っても薄型のテレビ時点で現在は骨董品。
可視映像放映機「ホログラムＴＶ」や紙ほど薄さに全て集約された「ペーパーＴＶ」などが争っていて。
既に過去の遺物もとい異物となった”形を持つ”テレビは骨董品レベルまでに消滅した。
特に俺の部屋に残るブラウン管は骨董品というかもはや化石。　動いてるのが奇跡に感じてしまう。
キッチンもかろうじてガスコンロで、積年の汚れがこびりついて変色している箇所が有って時代を感じさせる。

書籍そのものは大半が消滅し、薄型電子パネルにダウンロードしてから読む「電子書籍」が一気に普及した。
俺の自宅にカビの臭いを漂わせる本棚も、もはや言うまでも無い。
時代の流れに逆行し独自の道を爆進する我が家は、俺にとっての誇りだ。

――ジリリリリン。

「……うあぁ」

俺の朝は年代物のベルが鳴る目覚まし時計によって叩き起こされる。

睡眠妨害装置の原始的なモノで、適当にバザーで買ってきたものだ。

「6時30分か」

まぁ、いつもの起床時間だ。　食って起きて登校……なんて簡単には行かない。

俺の起きて最初の日課はあることから始まる。

まずは廊下に出て少し左に向かって歩いた先に目的はある。

――ドンドンドン、ガンッ。

「兄貴ー、起きろや」

兄貴を叩き起こすことから始まる。

まずはドアを強くノックして、なんとなくドアを蹴るのもいつものこと。

10秒経たぬ間に部屋主は現れた。

「……翔也、毎朝ありがと」

「なら自分で起きろや。　社会人だろ？」

毎朝弟に起こされているこいつは一応だ。　そして建前は兄だ。

「……ごめん」

気弱で、ひ弱で、無口で人見知りなノッポな兄貴こと”井口直人”だ。

「早く起きた、起きた」

「うん」

そう言って男兄弟が二人で歩いていく先には”リビング”なんて洒落た名前では決して呼べない居間がある。

居間と言っても食卓も兼ねるこの家はなんとも古臭い。　だがそこがいい。

そして出迎えるは――

「あ、お兄ちゃんズおはよー」

俺の可愛い妹こと”井口真奈美”だ。

「おはーす」

「おはよう」

真奈美は食卓に、朝食を準備して正座して待っていた。
ちなみに朝食は当番制で俺と真奈美が交互に作っている。

「お兄ちゃんズ、まずは顔洗って来てねー」

「へいへい」

「はい」

相変わらず出来た妹で、関心するね。
近頃の若い者と来たら……というフレーズ（死語）を玉砕するほどにしっかりしている。

てーことで、顔洗い。
一応兄貴を立てて先にどうぞー、まぁこれが立てているかどうかは少し疑問だけども。

「顔洗いしゅうりょー」

「終わった」

「よろしい！　じゃあいただこう！」

そう言って制服の上に来ていた生活感あふれるエプロンを外す。
そして3人揃って――

『いただきまーす』

ここだけは3人共通だ。

ちなみに母親父親は居るけど、あんま出居ない。二人とも会社が遠いので早朝出勤なのだ。
決してギャルゲにありがちな「両親は海外先に赴任して当分帰って来る様子はない」というこではない。
ちゃんと夜には帰ってきて、家族だんらんの5人の食卓が展開される。

『ごちそうさまでしたー』

朝食が終了すれば歯磨くなり、ある程度行く準備を整えてから――

「じゃあ出るぞー　電気とか消したかー？」

と、俺が家の鍵をキラリと光らせて兄と妹を急かす。　これ日常茶飯事。

「はーい」

「うん」

二人が出るのを見計らってからガチャガチャガチャガチャンと鍵を閉めて、仲良く3人で駅に向かう。
これが我が家井口家の朝だ。

１―５　人類の現実逃避と、ある二人のこと。

藍空市初ノ町。
一地方の町に過ぎないこの場所は、正直言って何の変哲もない普通な町である。
娯楽施設は乏しくレジャー施設は一切無い。
そんな町に１校だけ残った高校があった。

「市立藍空高等学校」

かつては高校が乱立していたこの町も、この藍空を残すのみとなっている。
そして「デジタル教育」を率先して推し進め、全校生徒３００人中２７４人の「自宅通学化」が完了した。

その自宅通学化には勿論俺は入っていない。
２７４人が学校に登校しなくなったが為に、学校内は閑散としている――訳ではない。
電子パネルを通じて発せられる声がそこら中に響いている。
それに――

「ったく。　いつ見ても慣れねぇな」
「そう？　まぁ背丈は合わせてくれてるし、いいんじゃない？」
俺と岬はそう話す。

何を話題にしているかと言えば、だ。

「電子パネルのくせして自立歩行とかどういうことだよ」

歩行というには語弊があるが、休み時間は学校中を歩き回った走り回ったりする。

電子パネルからは足代わりのポールが背丈ほどに伸びて、ボール先に供えられたローラーで自由に学校中を歩き回る。

もちろん、自宅の画面から本人が動かしているのは言うまでもない。

「なんかロボットスクールに来たみてぇだ」

「近未来的じゃん」

近未来過ぎて気持ち悪い訳でして。

電子パネルいっぱいにその学生の顔が映っているのも不気味すぎる。

たまに”人の姿”を保った方とすれ違うと、なんだか泣きそうになるね。

あ、ちなみに教師は一応学校に来てるので”人の形”云々は除外で。

授業風景はポールが戻されて板だけになった電子パネルが机の上で勝手に自立して黒板方面を望んでいる。

いやはや慣れない、慣れたくない、気持ち悪い。

俺こと「井口翔也」の説明をしておこう。
藍空高等学校２年３組で１１月に１７歳を迎える高校２年。

そろそろ進路を真面目に考え始める時期だが、この世の中が世の中だけに考えられない。
殆どが自宅通勤なんだもんな……やってられっか。

俺には兄一人、妹一人が居る。
兄は成人し２１歳をむかえたのにも関わらず頼りない。
妹は今年１５歳となって残りの中学生活を楽しみながらも我が家では結構しっかりしていたりする。

両親の説明は……特に特筆するものはないし、省略。

友人の中に「椿原岬」が居たりする。
なんとも色気が無く、見た目は”美少年が学ランを着ている”ようにも見えなくないから困る。
短髪で口調も男っ気ありまくり。　そして整った精悍な顔はなんともボーイッシュだ。

そして胸が無い、板。　本当に板。
遠慮とか配慮する必要が無いほどに「ツルペタ」なのだ。

いつも短髪でそんな体だから女子に見えないのだろう、カツラ付けてパッドでも入れてみたらどうだろうか？

もともと綺麗な顔ではある訳だし、案外イケるかもしれない……
というのがこれまた友人の相田の談。
俺はこいつというか異性に興味がないので、カツラ付けようが増量しようが女装しようが俺が揺れ動くことは無い。

……いやまぁ、この世には「ギャップ萌え」というものが存在し、それに俺は振りまわされる訳だが。
それはまだまだ先の話にしておこう……少し情けないので多少は躊躇する。

１－６　人類の現実逃避と、ある二人のこと。

―セカンドデイズ―

それはゲーム会社の「ＮＥＸＴ　ＦＥＥＬ」が発表したゲームとしては日常系に分類されるオンラインゲーム。
しかし在来のオンラインゲームとは一線を画したものだった――
「セカンドデイズシステム」と呼ばれるある画期的なシステムが搭載された。

”第二の日々”その名もそのままで「人の生きる二つ目の世界」という煽り文句で展開する。

かつてのオンラインゲームは、ゲーム全般にも言えることだがプレイヤーがただゲームのキャラクターを動かすだけだった。
ゲームにはプレイヤーの技能が要求され、指使いに慣れないとゲームなんてロクに出来やしなかった。

しかしこのシステムは「自分そのものがゲームの中に入り、行動出来る」というもの。
プレイ者に無料には配布される、ゲームと自分を繋ぐコネクションを使用しネット世界へとトリップする。
そのコネクションと言えばゴーグルのような形状で目を覆い隠す物となっているのが特徴、通称「ＤＮＡ　ドリームネットアイ」と呼ばれる。
ワイヤレス式ではなくコード式で、意識・記憶・感情をゲーム世界に移動出来た時点で取り外す事が可能。

取り外すというのも、ゲーム内で意識展開中でも現実世界の肉体を操作出来るが故で、現実に戻る時は改めてコネクションを装着すれば完了する。

オンラインゲームとして、ゲームにプログラムに設定されたゲーム内容をプレイすることも可能だが。
同じくパソコンのデータベース上にあれば、別のゲームをプレイ出来るから一気に人気が爆発した。

そうして人はこのセカンドデイズを入口に、二次元世界へと旅立っていく――

「なぁ、相田。　またお前、あれやってんの？」

「ああ？　”あれ”？　ああ”あれ”な」

「……で、やってんのか？」

「そりゃあ、やりまくりだよ」

不気味ながらも諦めて電子パネルに映った相田と会話している。
まぁ世の中には妥協ということが必要なようで。
何の話をしているかというと、”あれ”の話だ。

「いんやぁー”セカンドデイズ”たまらねーよ、マジで」

セカンドデイズ、最近流行りのゲームソフト……と言ったらあまりインパクトが無いが。
実際の流行りっぷりは尋常じゃない、まさに社会現象に違いない

ほどの普及っぷり。

００年代で言えば「ＤＳ」とかいう古いのゲーム形態のものがブームなったそうだが、それ以上らしい。

まったく、つくづく嫌になる。　ここまでデジタル化が進行するとな。

「昨日はギャルゲーの主人公になって、ハーレム主人公を満喫しちゃったよー」

「はーい、さいですか」

「……んだよ、翔也。　お前ギャルゲー好きだろ？」

「好きには違いないが、入ってまでやろうとは思わん」

「よくわかんねーな」

「お前の方がよくわからんわ」

大体俺はシナリオや絵の出来を重んじるだけで、ヒロイン勢は興味が無いのは何度も言ったことだ。

わざわざ主人公になったらシナリオの考察がしにくいではないか。

「いやぁ……現実世界では味わえない、あの胸の感触が――」

「消えろ、変態」

「って、本当に電源を押そうとするなよ！？」

ちなみに電子パネルは緊急時に備えて電源ボタンが備えられており、長押しするとシャットダウンされる。
イラっとした時はこうやって脅かしていたり。
「電源切られたら、怒られるのは俺じゃんかよー」
「知るか、んなもん」
という訳で、そんなゲームが流行っているらしい。
くだらん。
現実逃避にもほどがある。　現実を捨てて二次元に生きるなんて「生」というのを踏みにじってる。
人はこうして体を貰えたんだから、神様にありがたく思いながら精いっぱい生きるのは当たり前のことだと言うのに。
こんなゲーム、俺に言わせればどんなゲームよりもクソゲーだ。
というかあえてクソゲヱとでも言ってやろうか、古風にして皮肉を誘ってやるよ。
……こんのクソゲーが。

１－７　人類の現実逃避と、ある二人のこと。

セカンドデイズ。

それは俗に言う日常ゲーだ。　ただデータ世界の中で過ごすだけ……というのがゲーム内容だ。

ゲームのデータ世界内には現実を都合よく投影したかのような町や景色が広がっている。

そこでただ過ごすのがこのゲームなのだ。

厳しい現実から逃げる逃避先。

現実のことは忘れて、データでかたち造られた偽りの世界に身を投げ出すのだ。

まるでそこに自分が居るかのように、自分が生活しているかのように。

それに同じデバイス上にゲームがあれば、例えジャンルが違えども入り込むことが出来る。

ＲＰＧなら自分が勇者になって大活躍。　周りには慕われ、金は貯まる一方。

恋愛ゲーなら主人公になってそのヒロイン達を口説き落すことも選択次第で可能。

ゲームの世界で人は幸せを手に入れることが出来る。　例え世界が偽りで、その幸せも偽りでも。

偽りだとしても、本物そのものが無い厳しい現実よりは少なくとも幸せになれるだろう。

自室で未だに稼働するのに疑問を抱く古典型ブラウン管テレビで番組を何気なく眺めていた。
画質も現在浸透したものに比べるとカス同然であるが、面倒なので壊れるまで買い換えるつもりはない。

「……つまんねー」

土日の午後のテレビこそ退屈なものはない。
やっているのは深夜バラエティの再放送やらドラマの再放送やニュースぐらいで。　非常につまらない。

『今日午前3時頃ウシロ市コノエ町で失踪事件が発生しました。
”セカンドデイズ”というオンラインゲームのプレイヤー
かつゲームをプレイ中に失踪していることが今までの失踪事件と共通しており
”セカンドデイズ”を公開するオンラインゲーム会社は「そのようなことは関知しておらず当社のゲームとは無関係だ」
とのことで、警察は”セカンドデイズ”と失踪事件との因果関係を調査中です』

「……」

物騒な世の中だ。　こんな失踪事件が多発していて、そのニュースを見ない日はない。
……そうだ。　この事件が起こり始めたのも”セカンドデイズ”が流行り出した頃からだった。

「……ゲームなんかに現をぬかしてるからだ」

……というのはギャルゲーマーの俺が言えた口じゃないが。
だが、これだけは分かっているつもりだ。

「ゲームと現実は別。　ゲームはただの娯楽でお遊びだ」

しかし、現代を見渡してみるとどうだろうか。
あの”セカンドデイズ”が生活の一部になっている奴も見かける。

「……こんな世界じゃロクな未来はねぇよ」

それが原因でいつか根本的な破滅がこの世界には訪れる――昔流行った「厨ニ病」みたいだが、あながち間違ってはいない気がする。

「取り返しがつかなくなっても知らんぞ」

今の発言を誰に言ったかは……皆まで言わなくてもわかるだろ？

１－８　人類の現実逃避と、ある二人のこと。

……散々今までグチグチと現世界批判をしてきたのだが、今回は思い切り私情だ。
現時点での家族関係やら友人関係やら……そして俺についてなどを少し話すことにする。

俺は井口翔也。

まぁ以前にも紹介したが、藍空高校に通う１７歳間近の高校２年だ。
今までの話を聞いて、話して分かると思う……分からなかったら、もう何も言う事はない。

このデジタル化した社会が、世界が――大っっっっ嫌いだ。

冷たく虚しく悲しく下らない。　そんな世界を人は受け入れ始めている――いや、受け入れてしまった。
俺だけが異端で、俺だけが狂っているのかもしれない。　だとしても、それを生理的に受け入れることは断固として出来ない。
２０００年を迎えるまでは、パソコンなんて情報をただただ集めることしか出来ないインターネットを趣味でする端末に過ぎなかった。

それがどうだ？

今では生活の一部となって、それなしでは生きることもままらない事態だ。
なぜ、ここまで世界を壊す？　なぜ、ここまで人から生活を奪う？

俺には分かりっこないし、分かる日も絶対に来ない。
公言する。　俺は古臭いアナログ人間であると――

まぁいつも通り家を出て、学校へと走るガラガラガタガタ電車の発着する駅へと歩いていた。

「よぉー、翔也っ」

こそりこそりと近づいて、バシッっと不意打ちで背中を叩いてくる。

「いてて……んだよ、岬」

うあー、意外に力つええっての！　朝から背中がヒリヒリする……ちくしょうこの乱暴野郎め。

「翔也は今日も憂げだな！」

「お前はよくも元気だな」

はぁ……こっちは色々疲れてるってのに。

「お疲れか？　どした？」

うん？　すると、岬が心配気に俺の顔を覗きこんできた。

「いやさ……ギャルゲーをな、夜遅くから始めたらなんかハマっちゃっておうふっ」

い、いや背中痛いのに今度は腕か！　右腕かっ！

「ばーか、自業自得じゃねぇか！」

「てて……ふん、理解しているつもりだぐば」

こ、今度は腹か！　朝食ったものをリバースさせる気か！

「心配して損した」

「お、心配してくれたんか？」

「ま、まぁな」

「そりゃどうも」

「……なんかムカつくな、その言い方」

いや、少しは感謝してんだぞ？　少しだけど。

彼女（？）は椿原岬。

付き合いは結構長い、俗に言う幼馴染だ。

……一見魅力的に聞こえるその表現は、俺にとってはトキメキを一切もたらさない。

２００８年……5歳を向かえた幼き俺は幼稚園でこいつと出会った。

彼女とは言い難く、なんとも男友達をバンバン作り、幼少期からな

んとも男勝りだった。
屋内でママゴトをする女子とは裏腹に土煙浴びて、服や顔をあちこちに土汚れを作っていたのをよく覚えている。
……制定服はスカートで、確かにこいつも履いていたのだが、いかにも性格と短い髪やらで女っ気を打ち消すほどだった。

小学生になっても同じところに通う、そして相変わらずの男っ気。
見かけ倒しでは全くなく、スポーツ強し、腕力強し、握力強し――
ようするに小1の女子とは思えない総合的な力の持ち主だった。
小学3年で6年の上級生を拳喧嘩で打ち負かしたのは一時期伝説になった程。

中学生になれば少しは女っぽく身体の変化が起きそうなものの、小学生時代をそのまま背だけ伸びて、顔が更に凛々しくなった。
それが為に女子からよく告白されていたという……なんて羨ましい奴め。　と、その頃からつるみ始めた相田が呟いていたのを偶然覚えていた。
そしてスポーツ万能で、なんでも軽々こなしたが……部活はどこにも入らず、俺と帰宅部エブリデイだった。
ちなみに、この頃になると俺が「男扱い」すると何かしら拳が飛んできたのだが、どうしたものか？

高校生になっては、もう何も言うまい。　顔をより精悍に背はグングン伸びて、それなりの身長である俺と並びそうな勢いだ。
そして散々言うが、背と比例して大きくなるはずの胸は一向にぺったり。　隣や他の女子を恨めしく睨んでいる時が度々ある。
背が高く、胸も無いのでより「男っ気」が勝る。　大げさかもしれんが、男が女装しているようにも見えなくない。
……そんなことを言った時には、拳と足が器用にも両方飛んでくるので注意を払わなければならない。

まぁ……こいつの付き合いはそんな感じ。
適当に笑い話して、適当に遊んで、適当に喧嘩したり――なんとも親友だ。
正直言ってここまでウマが合う奴はなかなか居ない。　それほどに貴重な親友だ。

そんな親友という関係が壊れてしまうのを俺は恐れていた。
こいつ――彼女がちょっとしたコトの片鱗を見せ始めた頃に。

１―９　人類の現実逃避と、ある二人のこと。

片鱗１。

午前授業終了後の休み時間の出来事。
いっつも通りの俺と岬以外は電子パネルなカス空間が健在だ。
電子パネルが向きあって会話したり、電子パネルを歩行モードにしてで学食向かったり――
……電子パネルで学食行っても何の意味もねぇだろよ。　相田曰く
「雰囲気を楽しむのだよ、雰囲気を」とかほざいていたが、全く賛同出来ないから仕方ない。
そうして俺は軽蔑の視線を送りつつも相田を学食へと見送った。
それで生身の人間こと俺は、普通にここで飯を食わなければならない。

さてどうしたものか。
相田の居る電子パネルに溢れた学食か、教師と参考書データを購入する電子パネル野郎共しか訪れない購買か。
うむ……

「あのさー、翔也ー」

そんな時、思考を妨害してくる声がした。
……しかし受け答えしないと、後々面倒なので――

「ん？　どした岬」

「……今日は弁当か？」

？　何を言い出すのかと思えば。

「いや？　今日は学食か購買の予定だが……」

「なら――」

なら？

「作ってみたんだけど」

「？　何を？」

メイク？　メイドインミサキ？　何を？　Ｗｈａｔ？

「……翔也、アタシの話聞いてたか？」

ああ、聞いていたともさ！　というのは嘘だから適当に言い繕っておこう。

「ああ……じゃあお前の事だから懐古武器の”釘バット”か？　マニアックだなぁお前」

「アタシの人物像どうなってんだよ！」

「違うのか？」

いかにもな不良共を瞬殺しそうな程の力を持ち合わせているコイツ

に、釘のバッド？
鬼に金棒ならぬ、鬼畜に釘バットが……こいつぁ恐ろしいな。
「違う」
違うのかよ。　俺の妄想に使用したエネルギー請求するぞ、オラ。
違うとなれば――
「じゃあ……まさかアレか？　水圧で飛ばすペットボトルロケットを対戦闘用に――」
「だからアタシの人物像おかしいだろ！」
いや、大体あってるんだが。
「……じゃあなんだよ。　俺がアッと驚くような代物か？」
「うーん、どうだろな」
これは何かとってもサプライズな予感がするのは何故だろうか。
「ほう、期待しよう」
「てーことで」
すると岬は持っていた鞄からおもむろに何かを取り出し始めた。
出てきたのは――形巾着袋に入った角ばった……？
プラスチック爆弾か！　こいつ、遂にやりやがったな――

「弁当作ってきた」

「！」

その時俺は思った――この世界は近い内に滅亡すると。

「はい？」

この展開は、冗談混じりながらも予測していたプラスチック爆弾より恐ろしく感じた。

１－１０　人類の現実逃避と、ある二人のこと。

「アタシが今日弁当作って来た」

「なっ」

『ざわっ』

その時、クラス中の電子パネルが振り返る。うげぇ気持ちわりい……常なら思うのだが、この現状でそんなことを思う余裕などない。

「どうした岬！　熱か！　熱なのかっ！　それとも……もはや手のつけようの無い――」

「バ、バカッ！　アタシは何にもおかしいことはねぇよ！」

「嘘だね、おかしい奴は自覚がないからこそおかしい。皆そう言うものだ」

「……殴るぞ。と、言いたいところだが――」

殴らない……だと！　まさか殴るよりも非道い攻撃をっ！？

「早まるなっ！　悪かった！　俺が悪かった！　命だけは許してくれ！」

「何の話だよ……殴る前に食え」

「へ？　毒物を、か？」

「……これ見て毒物と言えるならアタシの信用が地に堕ちたか、お前の眼が節穴だな」

「それは勿論岬の信用が――」

＜ドカバキドカドカ＞

「っいてぇ」

思いっきり殴られた。こいつ力強いからな……手加減したんだろうけど、確実に数か所はアザになったな。

「ほら、早く食えよ」

「そんなもん……っ！」

岬の弁当箱の中身を見て俺は驚愕する――

「マトモ……だと！」

「マトモで何が悪い！」

「いや、な。　まさか、こんなコンビニで買ってきて詰めてくるとは」

「お前は本当に失礼なことしか言えねぇのな！　アタシが1から作ったんだよ！」

「……このソーセージもか？」

「揚げ足とるんじゃねぇよ……」

見た目は至極普通というか良かった。弁当箱は小さめで、中身は隙間なく埋められている。
よくギャルゲなどで見る「女の子がつくるお弁当」そのものだった。

おかしい、何かがおかしい！

「さぁ、食え」

「え、ええ……」

「く・え・よ」

「あ、ああ」

脅されてしまったが為に仕方なく箸を取る。一体どんな劇物が入っていることだろう。
こういう家庭的でない女……でいいのか。女が作り出す料理は「ありゃりゃ、やっちゃったー☆」と大抵、炭がオカズとなるのだが。
見てくれは本当に普通だ。調理もキチんとされているようだ。じゃあ……見てくれだけの見かけだ倒しタイプか！
それが一番口の中に入れた時点でのショックが大きい！　ちくしょう、どうすればこの――

「早く食え！」

「は、はいぃ」

岬怒りっぱなしである。顔が真っ赤だ……そんなに食べてほしいのか、この危険料理を。
独断と偏見で酷いことを言っているようにも聞こえるが、長年付き合ってきた俺がコイツの家庭的な要素を見たことが無い。

しかし、男である以上は覚悟を決めて口に運ぶしかない。

さよなら、俺の高校ライフ。来世ではもっとギャルゲが出来ますように、一つ卵焼きを――ぱくっ。
もぐもぐ……もぐもぐ……っ！

「ど、どうだ？」

「っ……味が少し濃いけど、美味いぞ？」

「そ、そうか！　良かった！」

「！！」

コイツはなんとも不思議な笑顔を作った。……一瞬だけだがこいつが女に見えてしまった。
俺も幻覚を見るほどに疲労困憊しているのだろう……しかし、食べた卵焼きは塩分が少し濃いだけで焼き加減は良かった。
意外どころか、奇跡を目の当たりにした気分だ。

「ほら、もっと食えよ」

「ああ」

箸が進んだ。味は全体的に濃いがご飯と一緒に食えば丁度ベストバランスになる。
最近では日常化が進んだ合成バランスフード（栄養が偏らないように調整されたブロック状の主食の事）なんてものより数十倍美味い。
ま、まぁ！　俺の作る料理や妹の料理には負けるけども！

しかし意外であった。岬にこんな一面があろうとは。
そして俺が弁当を食う様を、何処か嬉しそうに見ているのがかなり不思議に思えた。

片鱗2

午後授業終了の放課後の出来事。
いっつも通りの俺とミサキ以外は電子パネルなカス空間が放課後の廊下では健在――
……と、言いたいところではあるが廊下は虚しく寂しくひっそりと閑寂が包み込んでいる。
その理由も「電子パネルが家へ帰る必要が無い」訳で、授業が終われば家で通信を切断。
通信の切断された電子パネルは揃えて、自分の机へ直立、シャットダウンした上で机上の板に成りはてる。
傍から見ると至極不気味かつ不快な光景で、本数の少ない夕の電車目がけて学校から逃げるように下校する。
相変わらず外は不気味なほどに人気は無く、通信販売の荷物を積ん

でいるであろうトラックが東奔西走している。

「なぁショウジー」

「んー？」

「お前って……好きな奴とか居るのか？」

「えっ」

この展開は――！？

１－１１　人類の現実逃避と、ある二人のこと。

ギャルゲかよ。

ちなみに歩きながらも確実に歩を進め、駅へと辿りつく。
もちろんこと無人駅で、定期を改札にかざして駅構内へと入った。
それまでは岬の発言に関しては答えていなかった。

「……」

「な、なんだよ……さっきから黙りこくって」

「いやさ、お前。何か悪いものでも食べたのか？　拾い食いはいかんぞ」

キノコこそ最近は見かけないが、そこら辺に生えてる野草でも食ったのだろう。
なんてこった、まさか岬がここまで残念な人だったとは――

「だからのアタシのキャラ設定はなんなんだ！？」

最近食べさせてもらった弁当は確かに美味かった。見かけも良ければ味も良い。
しかしなぜに急激に料理の腕をあげたのか……そうか

「……料理の腕をあげたのも食いしんぼう故か」

「ちげーよ！　お前が喜ぶとおもって……あ」

……ええと、こいつは何を口走りやがったのだろう。お前が喜ぶと思って……？　俺の為に？　はい？
そんな俺がよくやってるテンプレートなデレ台詞を披露してしまうだとっ！？

「お前岬じゃないな……何者だ？」

俺の思うに、岬に化けた何か……しかし、俺に近づく意味があるのだろうか。
俺の家には虚しくも資産はないし、有能な妹と残念な兄しかいない。いったいこいつはっ……！？

「ふふ、バレた――じゃねえよ！　正真正銘の椿原岬だっ！」

「証拠は……その胸の平野っぷりが、ぐふっ」

怒りか顔を赤くした岬のエルボーが俺の腹へと入り、思い切りむせかえった。
いってぇな！　今回は力加減なしとかまったく……痛いって。

「わ、悪かったな！　ひ、ひひひひ貧乳でっ！」

貧乳というより、それは無乳だ。ギャルゲのヒロインでもあそこまでは、ない。
そして傍から見てもさらしを巻いているようにも見えないし……本当にないんだよな。
哀れむような切ない目をして俺は答える。

「悪くは無い。別にどうでもいいことだしな」

実際ただの掛け合いの一環で、そもそも女性に興味が殆どない。
それは変わらないことでもあり、ギャルゲ・エロゲの熱中のし過ぎで見飽きてしまったことにより一層増している。

「じゃあネタにすんなよ！」

「いや、なんというか癖で」

コンプレックスを貶すのは良くないことだとは思うが、ここまで反応してくれると……な。
反応があるから面白い、なんという最低なイジメ理論だが。
親しい仲ということを差し引くと、なんとただのじゃれ合いに。
あっちはあっちで「このギャルゲー廃人」などと褒めてくるので似たようなものなのである。

「……そんなにアタシはダメなのかよ」

「え」

今までのテンションはどこへやらで、一気に声が小さくなり、不安を表情に浮かべる岬。
それは今までに見た岬よりも儚く、ゲームのやりすぎと言わんばかりに消えてしまいそうに俺にはみえた。

「お、おい……らしくないな、しおらしくするなんて岬らしくない」

それは容姿こと男だが、僅かに女っぽさが垣間見えた。

今までの粗気味な性格を見てきたこともあって、今の岬は明らかに変だった。

「なあショウジは……ここまで男らしい女は嫌いなのか？」

嫌い……ねえ。

嫌いというのには、いったいどのような意味を示すのだろう。

”女性に興味がないのにギャルゲーを買う”という矛盾した性格故に少し考えてしまう。

それはライクとしてなのかラブとしたなのか。正直ラブと言われても期待に答えることは出来ない。

しかしライクなら――

「いや、別にいいけども。話しやすくて楽だからな」

「そうなのか……」

その時の岬は安心したような、残念なような複雑な表情を浮かべていた。

……意味わからねえな、最近のコイツはなんなのだろうか？

「それで、好きな奴ってのは――」

「いねえよ？」

「そ、そうか……」

今度は少し嬉しそうに微笑んだ。……最近の岬は百面相過ぎるだろう。

料理をわざわざ作ってきたかと思えば、好きな相手はいるか聞い

てきたり。
何か、彼女が変わり始めていた。彼女の中での、気持ちが心が。
そんな彼女の変化に俺は少しずつ戸惑っていたのも事実で。
そうして冒頭へと戻る。彼女が家に来て、俺があまりに言い過ぎたことを悟った時へと。

１－１２　人類の現実逃避と、ある二人のこと。

セカンドデイズというゲームは知っていた。
自分をゲームに投影することが出来る。ゲーム内ではなんでも好きな事が出来る。
そんなことは最早一般常識で、余りインターネットをしないアタシでも知っていた。

「……そんなにダメか、アタシは」

アタシの容姿、そんなにダメなのだろうか。それほどにアイツはアタシを女として見てくれないのだろうか。
アタシの体が女らしくないことは自覚している。口調も髪型も性格も……普通の女子とはかけ離れていた。
いつでも戻す機会があったのかもしれない、けれどアタシはそれに慣れ過ぎていた。
中学生頃は男子とサッカーボールを蹴ったり、野球でバットを振り遊ぶ日々。それがアタシには合っていて、とても楽しかった。
性格は大雑把で部屋は散らかり放題、好きなマンガは少年漫画で……日に日に男っぽさは増していた。
アタシが久しぶりに小学1年の頃の写真を見てみれば、長く伸ばした黒い髪に水色のワンピースと、しっかりと女の子の格好をしていたのは心底驚いた。

「あの頃のまま成長してたら……アイツはどう思っただろうな」

思った。もしも、と。そうなれば、アイツは――

「一人の女性として見てくれたのだろうか」

アタシは、アイツに好意を寄せている……ようするにアタシは翔也が好きだった。

アイツと話していると楽しかった、話題に尽きずに長く長く話し続けていた。

しかし最近、アイツはゲームにハマり始めた。「セカンドデイズ」なら時代の流れでよく分かる。

だがアイツは何故か「ギャルゲー」というものに没頭していたのだった。

アイツは「女の子よりもシナリオに興味がある（キリッ」と言ってはいるが。

「ぜってー、女だって」

なんでギャルゲーの必要性があるんだ、と。口では何度も言うが、アイツの言う事は嘘にしか聞こえなかった。

アイツはアタシには女として目もくれず、二次元の女の子に大きな興味を寄せている。そう見えて仕方なかった。

そう思い始めると、アタシは寂しくなった。悔しくなった。羨ましくなった。

アイツの心は……画面の中の女の子に向かっている。……アイツが楽しそうにゲームの話をする度に、アタシも同じように見てほしく思えてきた。

可愛いとか綺麗とか……画面の中の女の子にはそんな感情を抱いているのかもしれない――それにアタシは嫉妬し始めていた。

だから、最近アイツがゲームの話をする、ゲームをしているのを見ると気分が良くなかった。

そんなことをしているんだったら、アタシと話そうよ――思うだけで「アタシのキャラじゃない」と諦め言うのを止めた。

日に日に気持ちは大きくなっていき……ようやくアタシは気づけた。

「アタシはゲームに嫉妬していた。アタシはアイツが好きだった」

沢山の日々を過ごして、沢山の事を話した。その時からゆっくりと、雪が積もるようにアイツへの思いが募っていった。

「料理の勉強もしたのになあ」

指の絆創膏みて思う。スポーツの一つや二つでかすり傷一つ付かないアタシが慣れない料理で指を何度も切っていた。

不器用な事も嘆きつつ、自分で材料を買い溜めて、慣れないネットでレシピを検索して、アタシは食べられる程に料理の腕をあげた。

「だけどアイツはよお……」

何度も疑われ、からかわれ、虚しくなった。でも、アイツがアタシを苛めたいからそんなことを言っているのではないのを知っている。

いつもの日常で、今までの日常。それはもうよくわかっていた。けれど、最近のアタシは少し辛かった……のかもしれない。

「でも……食って貰えたし」

それに、美味いとも言ってくれた。その時アタシはすごくうれしかった。

褒めてくれて、美味しそうにアタシの作った弁当を頬張ってくれて——

「すげえ、嬉しかった」

また思いは募る。そして思う、アイツにとって好きな人はいるのかと。

もしかしたらアタシが知らないだけで、好きな人の一人や二人いるのかもしれない――そう思えば思う程、気になっていった。

だから、アタシは聞いてみた。好きな人はいるのかと……答えを待つときには胸が張り裂けそうで、アタシはアイツへの思いの強さを思い知っていた。

「……貧乳ねえ」

自分でも触ってもあまりの貧相さに涙が出そうになる。あ、これは……アイツが言う程にはない訳が無い――そう思っていた。

しかし風呂で、見渡すたびに……切ない平原だった。いつも反論ばっかしていたけれども……これはなあ。

「でも……アイツに言われると、な」

胸が痛くなった。やっぱり辛かった。

「アイツはきょ、きょ巨乳なんか！？」

あれだけ言うならそうかもしれない。じゃあアタシは――

アイツが好きな女が居ないということを聞いても心の底からは喜べなかった。その前にアイツはアタシを「話していて楽しい友人」と言ったからで。

分かっていたけれども、アタシに気持ちは一切向いていないことを思い知ってしまった。

そして数日後アイツの家をを訪れ、少しの口論の後にアイツはこ

う言った。

『ふん、なら俺をトキメかせて見ればいい』

……トキメかしたら、アタシを女だと認めるのか？

『さぁな』

……わかったよ。

――だから、アイツをトキメかせたかった。絶対に、必ず。

「ええと、これを付けて……」

パソコンに繋げられるヘルメットのようなものを用意して、ダイヤルを回し現実への帰還時間を設定する。

あらかじめダウンロードした「セカンドデイズシステム」のソフトを起動して。

自分の顔をパソコンに備え付けられたカメラで撮影する。そして名前や性格や容姿を入力すれば――

『ようこそ、セカンドデイズへ』

ゲームサイトへアクセスし。

『セカンドデイズシステムをご利用になられますか？　はい／いいえ』

”はい”をクリック。

『初回起動を1時間に設定の上で、頭にメディ・サポートをセット

してください』

時間は設定してあるし……頭に付けて。

『準備は宜しいですか？　規定事項をご確認の上でｅｎｔｅｒキーを押してください』

規定事項を早読みし、承諾にチェックを入れて――

「起動、っと」

アタシは、こうして「セカンドデイズ」というゲームへ足を踏み入れた。

１－１３　人類の現実逃避と、ある二人のこと。（前書き）

久方振りに続きです

１－１３　人類の現実逃避と、ある二人のこと。

俺はギャルゲーでしか起動しないパソコンを、アイツのせいで動かすハメになった。

「（”セカンドデイズ”で待ってるって……どういうことだよ）」

セカンドデイズに付いてはそれなりに知っている。
主にアンチテーゼの意味をこめて、徹底的に調べただけで、かなりに毛嫌いしているものだ。

セカンドデイズは要するに、自分を二次元の世界へと飛ばすゲームだ。
その物語背景やキャラクターは自分の好きなゲームから持ってきて、その中で主人公になれる。

「現実逃避もここまで来たか」

もともとゲームは娯楽の他にも、現実から逃げる為の口実でもあり、手段の要素も持ち合わせていた。
それでも一部の人々に限った話で、あくまで何らかの事情で友人や同僚の関係を築くことができなかったり、社会に適合出来なかったりとした者が鈍く輝く為の桃源卿のようなものだったのだ。

それが今では、殆どの人がそれを行っている。
この日本だけでも、パソコンを持っている人の九割がそれをプレイしているというのは現状。

老若男女問わずとはこのこと。閉鎖的情報社会の現代ではあまりにも迎合されたゲームだったのだ。

「……しかし」

ミサキには悪態を付き過ぎた。耐性の無い者に言ったら殺人願望や自殺願望が現れるほどだと、言い終えた後に理解した。

焦っていたとはいえ、あれはない。

ミサキはいくら友人関係でも、あれだけ言われて傷つかない訳が無い。

「……仕方ない」

なんにせよ、呼ばれたからしょうがない。知らん振りはいくらなんでも出来ないものだ。

俺は調べる為にも登録を済ませていたこともあって、すんなりとゲームを起動した。

「えーと……プレイヤーコードね」

ミサキのメールに書かれていた”プレイヤーコード”と呼ばれるプレイヤーとの交流をする為のコードを入力すると――

「ミサキ……だな」

プレイヤーコードが間違っていないか不安だったが、該当したハンドルネームは”ミサキ”だった。

そのハンドルネームの文字部分をクリックするとプロフィールの欄が現れる。

そこにはミサキそのものだろうプロフィールが記載されていて、

このプレイヤーが改めてミサキであることを確認した。
ちなみに俺のハンドルネームはショウヤでそのままだった。
プロフィール欄の下にある「この方へメッセージを送信」というところをクリックし、メール機能が立ち上がり入力。

『題名：ショウヤ　内容：来たんだが』

そして送信。
すると三十秒もしない内に、メッセージが返ってきた。

『題名：岬　内容：アタシのところまで来て。パスはｃｈａｎｇｅ』

アタシのとこぉ？　プロフィール欄には「この方の居場所への移動」の項目をクリックして、パスワード入力を行って――

「来たんだ……が！？」

このゲームは、様々な視点でプレイヤー動かせる。
俯瞰（ふかん）で見渡すありがちなゲーム方式から、プレイヤーの目と同じ位置で視点が移動するギャルゲー方式。
俺は後者を選択していて、すぐさま現れたのは――

ワードチャットとボイスチャットの二つが行える機能を使って、俺はワードチャットを選択して文字を叩く。

『ショウヤ：ミサキか』
『うん』

ミサキはボイスを使っていて、その声はミサキと瓜二つ。

『ショウヤ：本当にミサキか？』
『そうよ、アタシよ』

口調までそっくりだった。
しかし容姿は――

『……ど、どう？』

そこにいたのは紛れもない”女の子”だった。美少女と付いてもいいほどに、可愛らしい女の子だった。
しかしミサキでもあった。
髪も伸ばして、胸にもパッドを入れて、服装もいつもの男が着るようなものを止めたミニスカートで。
それでもミサキだった。
さっきのプロフィールも声も口調も――

ミサキだったのだ。
画面に映る、確かに彼女な彼女は――見違えていた。

「……困るな」

可愛いじゃねーかよ。

そして俺は、ときめいた。
初めて胸が熱くなった。
ギャルゲーにも色々と可愛い女の子はいる。それでも可愛い止まりで、何も感じなかったのに。

今目の前で、俺の動向を探るように上目遣いで覗いてくるかつての男らしい彼女に。

確かに目の前にいるのがミサキだという事実が、痛恨だった。

というか俺は――その一瞬で惚れてしまったのかもしれない。

＊　＊

ここまでが冒頭の全て。

そして、俺のせいで彼女が失われてしまう序曲。

この世界を恨み、俺に失望し、彼女にきっかけを作らせてしまった後悔。

そう、この時から始まってしまった――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6869n/

ぜにそせ。　―　全世界二次元化阻止戦争　―

2011年11月13日22時55分発行